

会津

を舞台とした文学

田宮虎彦（たみや・とらひこ）

明治四四・八・五

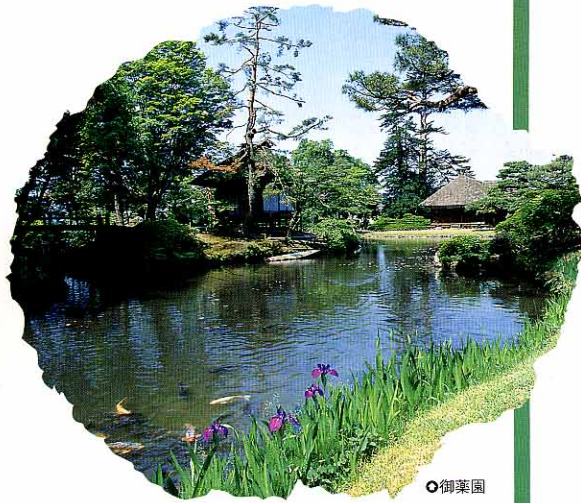
東京生。小説家。戦後すぐに会津藩からみた戊辰戦争を描き出す。出世作は、会津藩に關わる旧幕臣の遺児の生涯を描いた小説「霧の中」(昭22)で、他に鶴ヶ城の落城を描いた小説「悲運の城」(昭26)がある。

早乙女貢（さおとめ・みつぐ）

大正一五・一・一中国ハルビン生。本名鐘ヶ江秀吉。戦後山本周五郎に師事。「個人の檻」で直木賞。曾祖父が会津藩士で、戊辰の役で戦ったことから、歴史への思いがこもっている。



○飯盛山の白虎隊の墓



○御薬園

59 落城

田宮虎彦

小説 昭和二四年（一九四九）

明治維新に際して、徳川譜代の小藩の黒菅藩（会津藩がモデル）が、家老以下女や子供に至るまで幕藩体制の犠牲となって全滅をしていくまでを描く悲壮な小説である。この作品の背景には、太平洋戦争に翻弄された人々の無念の思いも込められている。

61 おけい・会津士魂 早乙女貢

小説 昭和四九年（一九七四）・昭和六〇年（一九八五）

「おけい」は明治二年に初の女性移民として一七歳でアメリカに渡った少女・おけいの薄幸な一生を描いたもの。

「会津士魂」は戊辰戦争を、会津藩側から描いた長編小説。藩主容保が京都守護職を拜命することから、鶴ヶ城開城まで、会津武士が忠誠を尽し、最後まで忠孝に生きた姿を描いた。



62 流星雨

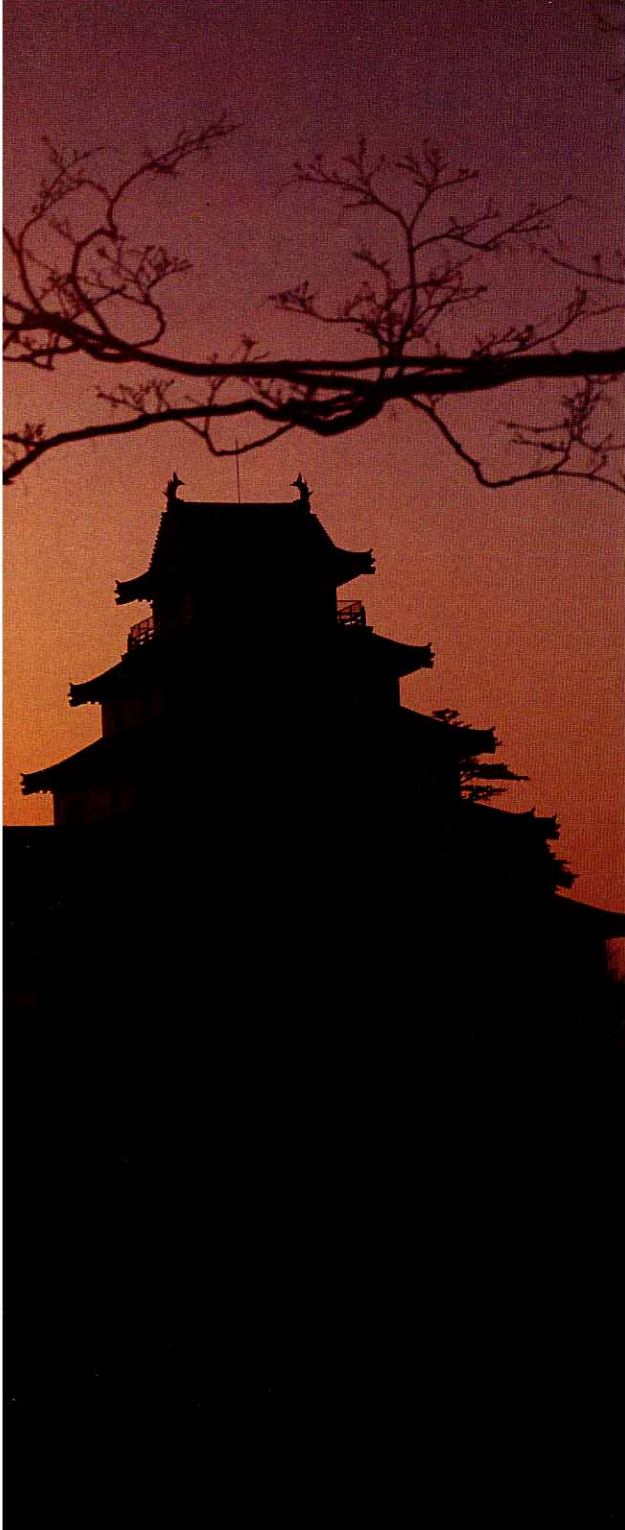
津村節子

小説 平成元年（一九八九）

会津武士・上田多聞の長女・あきは、戊辰の役の際一五歳、父と兄は戦場へ出て、一家は流浪の旅へ出るが、父と兄の遺骸・遺骨をさがしあてるところは、戦争の悲惨さをよく表現している。青森県斗南での窮乏の暮しを経て、あきは北海道へ渡る。敗戦の苦痛に耐え得たのは武士道の志があったからだろうか。昭和六三年から平成元年まで「世界」に連載。



維新前後の会津を描いた作品には、岡本綺堂の戯曲「維新前後」（明41）、佐藤民宝の小説「白虎隊」（昭19）、永岡慶之助「斗南藩子弟記」（昭35）網淵謙詮の力作長編小説「戊辰落日」（昭53）などがある。



○夕暮れの鶴ヶ城

津村節子（つむら・せつこ）
昭和二・六・五、福井市生。昭和四〇年「玩具」で芥川賞を受賞した。

井上靖（いのうえ・やすし）
明治四一・五・六、平成一・二・二九、北海道旭川生。「關生」で芥川賞を受賞。「孤統」あすなろ物語「敦煌」等多数。「磐梯吾妻スカイライン」の命名者でもある。



ある。

渡辺淳一（わたなべ・じゅんいち）
昭和八・一〇・二四、北海道生。昭和四二年「光と影」で直木賞、「遠き落日」では吉川英治文学賞を受賞している。

鈴木 隆（すずき・たかし）
大正八・八・二一、岡山県生。旧制喜多方中学、早大文学部卒。坪内逍遙に師事した童話作家・小説家、自伝的色彩の濃い長編小説「けんかえれじい」が代表作。

賀川豊彦（かがわ・とよひこ）
明治二一・七・二〇、昭和三五・四・二三、神戸市生。キリスト教社会運動家であり作家。自伝小説「死線を越えて」（大正）は大正期最大のベストセラーとなる。他に「貧民心理の研究」（大正）、詩集「涙の二等分」（大正）などの著作がある。

三浦哲郎（みづら・てつお）
昭和八・三・一六、青森県生。哲郎は末子だが、六人兄弟のうち姉二人が自殺、兄二人が失踪するという「病人だ血」に悩み、これとのかたが三浦文学の中心のモチーフとなる。井伏鱒二に師事し、昭和三年には「忍ぶ川」で第四回芥川賞を受賞している。他に知編集「結婚」（昭和）、長編小説「海辺の道」（昭和）などがある。

64 小磐梯・湖上の兎 井上靖

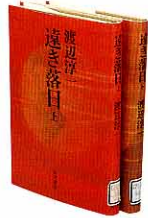
小説 昭和三六年（一九六二）昭和三八年（一九五三）

明治二年の磐梯山の噴火を描いた短編小説「小磐梯」の主人公は収税吏、裏磐梯の部落の耕作面積を調べるため留吉と金次二人の助手をつれて喜多方から檜原まで大塩峠を越えて行った。「磐梯は、頂上に持っている大磐梯、小磐梯、赤塩の三つの峰」を持っていたが、小磐梯が地鳴や子供達の「ブン抜ゲンダラ、ブン抜ゲロ」の絶叫の中で、永遠に噴火で姿を消す。私と宿で一緒した氏名不詳の蒲鉾商人と自殺希望の若い男女も姿を消すが犠牲者数には入っていない。

『湖上の兎』では「一般には西安積の五つの村を山蔭」と呼ぶが、土地の人は暗い呼び名を嫌う。自殺した香住りえは、この安積郡猪苗代湖畔（現・郡山市）の出身。その西安積に向けて湖面を吹く風に沢山の兎が跳ねる様に白波が立つ。主人公の私は「湖上の兎」を見ていると、この美人を思い出す。

67 遠き落日 渡辺淳一

小説 昭和五〇年（一九七五）



明治九年に猪苗代湖畔の貧農の家に生れた野口英世は、超人的な努力と周囲の援助で東京、医師の資格を得た。その後、単身アメリカに渡り、細菌学で数々の功績を挙げたが、英世は黄熱病研究のためアフリカの地で、自らの研究の犠牲となった。英世の成功の蔭には、母シカの大きな支えがあった。懸命に生きた母、壮絶に生きた息子を描いたもので、映画化もされ好評を博した。

68 けんかえれじい 鈴木隆

小説 昭和四一年（一九六六）



クリスチャンでありながら喧嘩に勝つための修業にひたすら精進する硬派少年南部麒六が、戦前の喜多方中学へ転校して来た。「喜多方のメインストリートは、道幅を十分にとつてあり、かなり広々とした道路であった。両側に、三尺程の溝があり、押切川からと

り入れた水であるうか、澄んだ流れが、北国特有の長い廂の下をひたひたと洗っていた」。会津中学昭和白酒子さんへの一途な思慕を抱きながら、一兵卒として中国大陸で散っていった麒六の喧嘩人生を、軽妙なユームアをちりばめつつ劇画調の乗りのよい文体で奏でた悲歌。新藤兼人脚本の同名の青春映画も鈴木清順監督の名作だ。

70 乳と蜜の流るる郷 賀川豊彦

小説 昭和二〇年（一九三五）

喜多方から三里の地の塩村（北塩原）出身の青年田中東助が、病氣と貧困に苦しむ人々が多い故郷を救い、「乳と蜜の流るる郷」にするには、立体農業と協同組合運動とによるしかないこと知り、多くの苦難をのりこえ、檜原湖畔一帯に築土を現出させるまでを描く。キリスト教精神によって、常に貧しい人々の生活救

済に心身を捧げてきた作者の根本思想がよく表れている小説である。

71 まぼろしの橋 三浦哲郎

小説 昭和四六年（一九七二）



橋をつくることに夢を抱く土木技師の霞五郎は、山中で遭難しそうになった若い女性塔ノ沢香織を救助する。香織は豚汁を初めて食べて元気を取り戻し、二人の仲は愛へとむかう。やがて霞は、只見川の流れる橋の多い町柳津へ、橋の補修工事のため出張して来る。そこへ二月の或る日、豚汁が食べたいといっている霞のことを聞いて香織が現れる。だが二人の愛は、決壊したスノー・ダムの急流に二人がのまれてしまうことで、悲惨な終わりをむかえる。



© © につかつ

© © 松竹



©猪苗代湖と磐梯山

皆川博子（みながわ・ひろこ）
昭和五・一・二一 京城生。昭和六一年に『恋紅』で直木賞を受賞したほか、日本推理作家協会賞なども受賞している。



三島由紀夫（みしま・ゆきお）
大正一四・一・一四
昭和四一・一・二一
二五 東京生。『潮』『豊饒の海』など数々の名作を残し、四五歳で壮絶な剖腹自殺を遂げた。

小山いと子（こやま・いとこ）
明治三四・七・二二 平成元・七・二五
高知市生。この作品の評価をめぐり、文壇に「ダムサイト論争」が起った。昭和三五年「執行猶予」で直木賞を受賞した。

城山三郎（しろやま・さぶろう）
昭和一・八・八一 名古屋生。本名杉浦英一。昭和三年「総会屋錦旗」で直木賞。経済小説で独自の分野を開拓した。

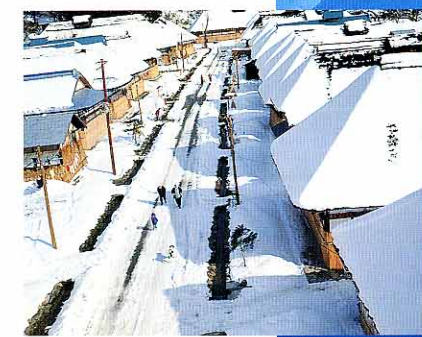
曾野綾子（その・あやこ）
昭和六・九・一七 東京生。本名三浦知寿子。キリスト教的理想が根底にある名作を数多く書いている。開発以前の只見を舞台とし、清冽な愛を描いた『只見川』（昭和四三）もある。



司馬遼太郎（しば・りょうたろう）
大正二一・八・七
大阪市生。歴史小説家。代表作に、『国盗り物語』、『龍馬がゆく』、『坂の上の雲』、『街道を行く』などがある。



○南会津の山並み



○大内宿



○田子倉ダム

73 会津恋い鷹

小説 皆川博子 昭和六一年（一九八六）

南会津の豪農で肝煎きまひの家に生れた娘・さよは気丈な女性。会津藩の鷹匠の下士に嫁ぎ、鷹の飼い方を覚える。戊辰戦争の荒波にもまれて、会津から明治の吉原へ、みだらに美しく時代の嵐の中を生きる姿を描いたもの。書下ろし作品で昭和六一年に講談社から刊行。



74 沈める瀧

小説 三島由紀夫 昭和三〇年（一九五五）

昭和二〇年代の後半から只見川電源開発のダム建設がはじまった。城戸昇は電力会社に勤めるエリート。彼はダム建設の越冬隊に加わって奥会津に入る。彼は出発前に人妻の頸子と会うが、越冬が終ると頸子は…。瀧に託して不毛の愛を描いた作品である。

75 ダムサイト／黄金峡／無名碑

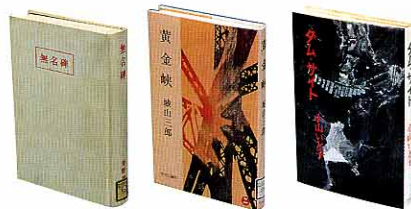
小山いと子／城山三郎／曾野綾子 小説
昭和三八年（一九五三）／昭和三四年（一九五九）／昭和四四年（一九六九）

昭和二〇年代後半から三〇年代には、電源開発のダム建設ブームが起き、奥会津の只見川に沿って、巨大ダムが次々と建設された。これをめぐり多くの小説が書かれたが、テーマの一つは、住民移転の補償にまつわるもの、他は建設にあたる技術者達の姿であった。

『ダムサイト』は、村の娘ますみと相愛の青年茂治、働き者の茂治も補償の現ナマが出まわると墮落するという筋で、ダム建設のもたらした悲劇を描いている。

『黄金峡』は、用地買収のため、かつて学童疎開でこの地に来たことのある主人公若松が目にする、色と欲のからむ土地攻防と黄金騒動を描く。

『無名碑』は、ダムの建設技術者を主人公にしたもので、ダム工事を終え、東京に戻る途中知り合った女性と結婚した三雲は、その後、子供の死や妻の発狂に直面する。タイ奥地の道路建設に派遣されるが、そこでは更に大きな悲劇が待ちかまえている。



76 峠

小説 司馬遼太郎 昭和四三年（一九六八）

自由な考えをもち、近代西欧思想を学んだ開明論者でありながら、長岡藩を率いて官軍と戦った家老河井継之助の、北越戦争に敗北していく壮烈な姿を描く。継之助は只見村に落ちのび、若松城にいた松本良順の治療を受けるが、塩沢村で息をひきとる。